

浮羽まるごと博物館（※1）企画

佐藤先生に聞く！

【第4回】山北石の歴史

聞き書き…矢倉 紗弥佳

うきはブランド推進隊

インバウンド推進プランナー

佐藤好英先生は、長年うきはで中学校の教諭や小学校校長を務められ、数多くのうきはっ子を導かれた「みんなの先生」。現在はうきは市立浮羽歴史民俗資料館で、うきは市の歴史を守り伝えながら、浮羽まるごと博物館協議会の会長も務められています。そんな先生が情熱を注ぎ収集したうきはの歴史について、前任の馬場に代わり、ブランド推進隊矢倉がお送りしていきます。

今回は、筑前・筑後・肥前地域で多く見られる江戸時代のブランド石「山北石」の歴史に迫ります。

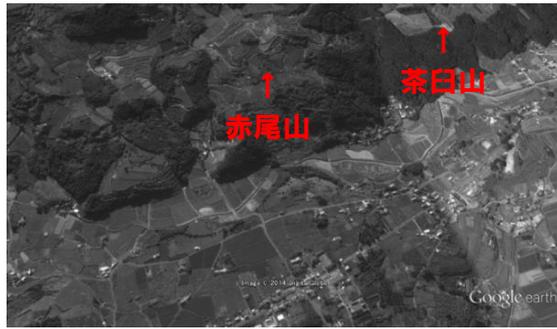
◇山北石の由来

山北石の起こりは、今をさかのぼると約350年前。江戸時代の初め、筑後三水道（大石・長野・袋野）開削のころ周防（今の山口県）から、石工が招かれ、山北に根を下ろしたことが始まりと言われています。

当初は山北の村に十六人の石工がおり、それをまとめていたのが「江藤氏」



▲白石家の国本丁場跡（石工場）



▲当時、採石されていたのは赤尾山、茶臼山等にある安山岩でした

「白石氏」二人の頭梁でした。山北の石工達は農業の傍ら、地元の山から石を切り出し（採石）、加工（石工）をすることで生業を立てていたそうです。

◇九州に名を馳せた山北石ブランド

当時の石工職人は、地域のインフラを支える要の存在でした。有馬藩は山北石工頭梁に、たくさんのお米を授けるとともに、本来武士のみが持つことのできる脇差の携帯を許可するなど、様々な優遇を行いながら重宝していました。

彼らが作るものの多くは、神社仏閣の石造物でした。例えば鳥居、狛犬、灯籠などうきは市でよく見る石造物は、そのほとんどが山北石だそうです。

明治に入って、石工の活動主体は山北から小塩へと徐々に移動し、その中心を担うようになったのが「高浪氏」「原田氏」でした。やがて小塩と山北の石工から有志が集まり、石材会社を立ち上げると、その製品は筑後川の荒瀬から船に乗り、久留米や筑前、遠くは肥前（今の佐賀県）まで運ばれるようになりました。風化するものが少なく耐久性が強い山北石の特性と、力あり、いかめしい中に優しさがあり、迫りまで感じられる山北石の作風が高く評価され、山北石ブランドは一躍九州に名を馳せたのでした。



▲長野水神社狛犬（大正3年 高浪要太・源蔵作）



▲清水寺観音堂前石灯籠

◇山北石の現在

こうして山北村をはじめ、うきはの地は石材業で大きく栄えたのでした。しかし明治後期以降になると、採石量の減少、墓石に使われる石材の変容により山北石の名は徐々に衰退、やがては後継者不足により石工職人自体も少なくなってきました。

しかし彼らの彫った石材物は、今現在でも風化することなく遺されており、私たちの生活をあたたく見守ってくれています。普段何気なく目に映る風景は、九州に名を馳せた石工職人達の、精魂刻まれた作品によってできているのです。その意味でいえば、うきはで暮らす毎日がちよっぴり贅沢に感じられます。

今回は、袋野堰にまつわるお話を予定しています。お楽しみに!!

（※1）浮羽まるごと博物館とは…うきは市全体を博物館と見立て、住民一人ひとりが学芸員となつてうきはを知り、内外に伝えていこうという取組です。